****

**「笹川杯作文コンクール2017-感知日本-」**

**～日本語で応募～**

****

**公益財団法人日本科学協会**

**業務部 国際交流チーム**

**目　次**

**★優勝**

華東師範大学 湯依姮　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

 　広東外語外貿大学  黄俊捷　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

青島大学研究生院 潘東晨　 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

海南師範大学 柏毅洋・　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

**★二等賞**

厦門大学　黄嘉珞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

華南師範大学　呉伊甸　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9

**★三等賞**

大連民族大学 外国語学院 王紫玉　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

吉林大学　王俊天　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

**★優秀賞**

福建師範大学外国語学院　張偉　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

浙江越秀外国語学院　丁亜萍　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

東華大学外国語学院　艾雨　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

山東大学外国語学院　李靖　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

北京外国語大学日本学研究センター　劉翠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

南京郵電大学外国語学院　郝順　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

上海師範大学外国語学院　陳露文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

恵州学院外国語学院　洪斌鋭　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

大連工業大学外国語院　盧芸芬　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

福州外語外貿学院　王暁霊　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

**★優勝**

**わたしと日本**

**華東師範大学 湯依姮**

基本的に私は音楽が聴ける環境にあれば、音楽を聴いている。しかも、気に入った曲があると、何回もリピートして聴いてしまう癖がある。音楽にはやはり霊性があると思う。昔聞いていた音楽はある形で記憶に残り、それを聴くとその頃を思い出したり、懐かしい匂いと雰囲気が鮮明に蘇ったりする。

私が日本語を勉強し始めたきっかけも日本の音楽である。『Ｊポップの心象風景』という本に書かれているように、音楽には人を魅せる力があり、音楽は私と日本を繋ぎ、数々の思い出とともに心に染み入る。

 **哀しみのルート16――田舎の風景**

大都会で生まれ育った私は、一年間の田舎暮らしにかなり不安を抱いていたが、今はすっかり日本の田舎を好きになった。

私が住んでいた町は、国道16号環状線が通っている所謂田舎である。空港から大学へ向かう途中、バスの窓から田舎の景色を見て、その美しさと心地よさに惹きつけられてやまなかった。

イザベラ・バードというイギリスの旅行家は、「日本の農村は、鍬で耕したというよりも、鉛筆で描いたように美しい」と旅行記の中で書いている。時あたかも菜の花が色鮮やかに咲く頃、可愛らしい家屋が黄色の絨毯の中にぱらぱらと散在した光景は言葉では言い表せないほど美しかった。そんな中、ワンちゃんを連れてゆっくり散策している夫婦を見かけ、ごく当たり前の光景に癒された。

「哀しみのルート16」を口ずさんで、ぼんやり考え事をして、いつの間にか空が夕焼けで茜色に染まった。その風景はとても温かく、そして切ないものである。

 **奏（かなで）――熱い！ニッポン！**

スキマスイッチの「奏」とは、何年かぶりにラジオで出会った。夢の実現のために離れ離れになる恋人同士、独り立ちする娘とそれを応援する親、苦しい時から一緒に戦ってきた仲間の旅立ち……毎回違うストーリーが頭の中で展開され、聴くたびに涙してしまう本当に大好きな曲だった。しかし、そんなに馴染み深い曲だが、「奏」が甲子園のテーマソングに選ばれたというのは知らなかった。

ずっと競技とは無縁だった私は、三浦しをんさんの『風が強く吹いている』という作品を読んだのがきっかけで、スポーツに興味が湧いた。

「夏は甲子園、冬は箱根駅伝」と言われるように、題材となる「箱根駅伝」は甲子園並みに盛り上がり、注目されている競技大会の一つである。箱根駅伝にハマった私は初売りに行くついでに、大手町の近くに見に行った。留学先の大学は出場していなかったが、現場の熱い雰囲気に惹かれ、「頑張れ、頑張れ」と周りの人と一緒に声を上げ、手に汗を握ってゴールで選手たちを待っていた。

その時、ふと「奏」のメロディーを思い出した。応援ソングに相応しくない悲しさは心地よい切なさに変わり、胸がギューと締め付けられた。甘酸っぱい青春を久々に味わって感動した。夢を追いかける途中で挫折したり、どんなにめげそうになっても、夢を諦めたりしない前向きな姿勢が眩しい。

昔聴いていた曲は、スポーツ大会の熱いイメージと重なり、自分の青春時代を鮮明に思い出させつつ、次第に愛することに情熱的で一生懸命な日本人の印象へと繋がっていく。素敵な青春の一ページを作ることに専念し、汗水たらして青春を全力で謳歌するのは日本人らしいと思わずにいられない。

 **サヨナラの意味――日本との絆**

一年の締めくくりとして、深夜ラジオで「サヨナラの意味」という私にぴったりな卒業ソングに出会った。それを聴いて、日本での一年間の留学生活が隅々まで思い出された。

日本との絆、やっとできたと、曲を聴きながらそう思った。言葉も住居も中国と全く違う土地での生活は、孤独や力の足りなさを感じることも多々あったが、今振り返ってみれば、やはり楽しい思い出は圧倒的に多い。

人見知りの私は、コミュニケーションを重ねることを通じて、先生に名前を覚えてもらったり、サークルの皆に仕事を任され、信頼されたりして、日本人の優しさに触れた。インドア派だった私は、違う景色と違う自分を探すため、旅に出た。一人旅をして孤独を噛み締めたり、こぢんまりとした浜の絶景やグルメなどを満喫したりして、たくさんの土産話を持って帰ってきた。

歌詞に書かれているように、「サヨナラに強くなれ、この出会いに意味がある。悲しみの先に続く、僕たちの未来」。出会いは偶然ではなく縁によるもの。「縁」を大切にしていると何時しか「絆」に変わる。日本語を専門にした私は、この選択を後悔していない。日本に出会った時の不安と期待が入り混じった甘酸っぱい気持ちと日本と別れた時の名残惜しさは、今考えても夢のようなのである。

音楽のお陰で、日本の人々とのつながり、素晴らしい出会いと交流の場ができただけでなく、Ｊポップというメガネで日本という国を異なる視点でのぞくこともできた。私はこれからも歌いながら、中国と日本の共生への道を探り続ける。

**未来の中日関係に向けて**

**広東外語外貿大学  黄俊捷**

昔々、ある兄弟が共に住んでいました。最初、兄は博学で、大人しいから、多くの人に慕われました。それにひきかえ、弟はまだ幼いので、何も分からないくせに、自負心だけは強かったです。ある日、弟が偉そうに兄に対してこう言いました。「年齢的には、あんたはずっと年上なんですが、偉いのなんのと思ってないよ。あんたはもうそろそろだ！でも、僕の人生はこれからだね！」これを聞いて、兄は何も言わずに、ただ苦笑いしました。全然相手にされなかったから、弟は悔しくてたまらないようでした。しかし、時間が経つにつれて、弟も段々兄のいいところを分かるようになってきました。「兄貴、兄貴。」と呼んで、謙虚に兄から色々なことを教わってきました。そうしているうちに、弟もようやく一人前になりました。この先も幸せな生活を送っていたかと思いきや、二人は考えの食い違いで大喧嘩をして、殴り合う羽目に陥ってしまいました。後は仲直りしましたが、トラウマを残して、今でも引きずっています。

話はここで終わりますが、オチはありません。それなら、なぜこの話をするかというと、実は、長い間に、中日関係はこのストーリーの中の兄弟とほぼ同じようだと言えます。とても仲のいい時期もあったし、悪くなった時期もあります。そして、これから、どうなるか、誰も知りません。それに、未来の中日関係に向けて、私達はどんなことをやるべきかというのも全然手がかりがありません。

そうしたら、ここで、ちょっと振り返ってみましょう。以前の人は当時の「未来」の中日関係に向けて、どんなことをやりましたか？

少し前の歴史をさかのぼれば、小野妹子、鑑真、阿倍仲麻吕、栄西など中日の有名人の名前が続々と出てきます。

阿倍仲麻呂は在中留学生でありますが、唐で国家の試験に合格し、唐朝において諸官を歴任して高官にまで上って、晁衡という名前で中国の史書に記録されました。そして、鑑真と言えば、元々唐の僧で、日本の学問僧の要請に応じ、五回の渡航失敗と失明にも関わらず７５３年に来日して、中国の文化を広く宣伝しました。彼らが遣隋使や遣唐使や唐僧などの名で、色々な困難を乗り越えて、両国の友好関係に貢献しました。それに、今でも彼らの功績は文化財の形で多くの人に歌い上げられています。

私達の先祖は何千年前に両国の文化の架け橋を通しましたが、今、私達に残されたのはどうやって戦争でこのぼろになった橋を修復しながら、新しい元素も入れるかという使命です。雲をつかむような話みたいですが、実はそんなに難しいことではありません。

今の日本といったら、多くの人がすぐアニメを思い浮かべます。それに、中国を言えば、１０人に８人がパンダという動物を代名詞に選びます。日本のアニメ文化と中国のパンダたちは、両国だけではなく、世界的にも高い人気があります。だから、これを突破口にして、中日の距離を縮めることを目指しています。

８０年代、大ヒットした日本のアニメが中国に進出しており、沢山のファンを獲得しました。その後、社会環境が大きく変わったにも関わらず、日本文化に興味を持っている人はまだ沢山います。去年、大人気を収めた「君の名は」もその例の一つです。だから、これを踏まえて、日本のアニメを選択的に輸入し、中国風めいた日本のアニメを作ることを通して、もっと多くの文化交流の場も作り出します。そして、アニメの他に、日本の他の文化を中国の文化と連携して宣伝するのも一つの手段です。例えば、日本の着物と中国の漢服です。この二つには共通した点もありますが、それぞれの情緒もあります。知れば知るほど面白くなりそうです。

一方、中国の場合において、両国の理解を深めたかったら、色々な方法を講じられます。その一つは「パンダ外交」で、パンダの可愛さをより広く披露することです。なぜなら、実は、日本人はパンダと直接会う機会がなかなかないです。もし、彼らは私達の目を借りて、パンダのことを詳しく知れば、パンダ並びに中国のことへの好感も増えるかもしれません。そして、パンダにとどまらず、今、中国で流行っているものをどんどん日本の方々に紹介したりするのも悪くないと思います。シェアリングサイクリングやアリペイをはじめ、色々な便利な発明はその例です。これらをもって、彼らが中国への悪い印象を少しでも変えると、両国の関係も段々よくなれるでしょう。

総じて、私から見ると、未来の中日関係に向けて、まず過去を顧みなければいけません。そして、それを経験として、また適切な打開策を決めます。急がないで、徐々に進むのは両方にとっても納得が行くのではありませんか。

**未来の中日関係に向けて**

**青島大学研究生院 潘東晨**

「千早ぶる　神代もきかず　龍田川からくれなゐに　水くくるとは」

秋の終わり、村田先生から在原業平の和歌が書かれた一通の絵葉書をもらった。これを見るたびに、往時の思い出が鮮明に蘇る。

大学で日本語を専攻している私は、最初日本語を単なる一種の技能と考えて、好きでも嫌いでもなく、日本のことにも特に関心がなかった。しかし、村田先生と出会って初めて、日本に対する気持ちが変わり始めた。三年生の時、村田先生は私たちに日本古典文学を教えてくださった。日本の古典文学は内容も複雑で、難しいところも多いから、授業はきっと退屈だと思いきや、村田先生は生き生きとした言葉を駆使して、私たちを古典文学の世界へ引きずり込んだ。知らず知らずのうちに、私も日本の古典文学、特に美しい言葉に溢れる和歌に夢中になってしまった。ある日、私は先生と一緒に学校の小石を敷きつめた小道を散策していた。ちょうど十月の頃で、道端の楓はすでに真赤に染まって、何枚もの紅葉がひらひらと秋風に舞っていた。目の前の光景から一首の和歌を思い浮かべた。すると「千早ぶる　神代もきかず　龍田川　からくれなゐに水くくる」と私は思わず細い声で詠った。「この和歌の意味を知っているのか？」と先生に聞かれたので、「はい、楓を詠んだものでしょう。」と自然に答えた。「確かに表面的には楓を詠んだ風景の歌だが、実は業平が二条の后に捧げた恋の歌だという説もある。でも、僕が気になっているのはこの『唐紅』（くれなゐ）だ。当時の中国が日本にとっての先進国だった。たくさんの優れたものが日本に渡ってきていたので、唐紅は唐土からの綺麗な紅色という意味となった。中国と日本の絆は大昔からあるんだね。」と先生は微笑みながら解釈してくださった。

当時の中日関係は今よりよほど良かったのではないかと思いつつ、図書館で資料を調べた。中日の交流は漢代から始まって、唐代にもっとも盛んになった。遣唐使の隆盛に伴って、唐風文化が日本で一時に栄えたことが「古今集」などの和歌集にも現れている。また「万葉集」は漢字で書かれて、内容も中国文化の影響を受けている。その漢字を表音字として用いた万葉かなは簡略化されて、今のひらがなとなる。先生のおっしゃった通り、中国と日本は切っても切れない絆があって、和歌もその一つの有力な証明だろうと感じた。

その日から、日本のことをもっと知りたくなった。中日両国人民のお互いに対する考えについて先生と何度も話し合った。話によると、先生は中国に来る前に、中国のことをあまり知らなかったので、メディアや他人の説による先入観と思い込みがあったそうである。しかし、彼は中国に来て初めて、自分がさまざまな誤解を抱えていたと気づいた。中国でその奥深い文化と優しい人々に心が打たれた。「以前は交流がなかったので、誤解が生じた。でも今僕は中国が好きだ。帰国したら、僕は本当の中国のことを周りの人に詳しく話して、誤解を解こうと思う」と先生が話してくださった時に、何と答えて良い分からずひたすら感動したのを覚えている。「もし今が古代であれば、先生は遣唐使になっているでしょう。」と私がやっと冗談半分に言うと、彼は「それじゃ、潘さんにも中日交流の使者になってほしい」と真顔でおっしゃった。この話を心に留めると同時に、交流の力量をしみじみと感じた。

今の中日関係は微妙だと言える。政治における主導権争いは続いても、経済や交流においては依然より良い関係も少なくない。発展した両国はお互いに歴史に残る問題を直視して、交流を通して矛盾が解ければ、未来の中日関係に新しいページを開けるのではないだろうか。さらに、日本語を勉強している私たちは自ら中日交流の力になれると思う。私たちは草の根では国家間の矛盾を越えて交流ができる。お互いの偏見を捨て去って、思い切って一歩前に踏み出せば、理解し合うことはさほど難しいことではなくなるだろう。

中国には「水滴石穿」(水滴も同じ位置に落ち続ければ、いずれ石にも穴をあけることができる) という諺がある。小さな力でも、積み重ねれば強大な力になることの喩えである。中国の古代から始まった友好の歴史を思い直し、かつて不幸な時代もあった歴史を直視して、一人一人の小さな努力が結集してこそ、未来の中日関係に明るい希望が湧いてくると信じている。

**私と日本**

 **海南師範大学 柏　毅洋**

人の記憶には、忘れられないものがたくさんあります。例えば一曲の歌、1冊の本、また1人の存在……。しかし、私にとって、一番忘れられないのは、かつて日本語先生に教えてもらった日本の四字熟語、「一期一会」です。一見四つ文字ですが、その中に深い意味が込められて、最も大事なことを考えさせられました。

　一期一会とは、茶道に由来する日本のことわざ・四字熟語です。「一期」というのは「一期一命」、「一生」または「一辈子」などの意味で、「一会」とは一度の出会いということです。茶会に臨む際には、その機会は二度と繰り返すことがなく、一生に一度の出会いであるということを心得て、亭主・客ともに互いに誠意を尽くす心構えを意味します。つまり、人と人との出会いが一度限りの大切なものであり、大事にしなければならないという意味です。

「一期一会」は人との出会いが、人生に一度きり、二度と巡っては来ないチャンスという意味です。それを広く考えれば、人生の旅のなか、一回のみのチャンスという意味も含まれています。そのチャンスは、人との出会い、あるいは新たな場所との出会い、または、人生の夢を実現できるチャンス、大切にすべきチャンスでもあります。

よく言われるように、「大切なものを失ってはじめてその大切さがわかるようになります」。２０１４年は私にとって、忘れられない年でしたが、それも人生の「一期一会」のチャンスに巡り合えた年でした。大学入試の失敗で、第一志望の大学に入れず、私の精神に大きなダメージを受けました。あの年の夏休みには、悔しく、悲しく、自暴自棄の毎日でした。

その後、自分の好きな日本漫画を読めるために、日本語の専攻を選んで、今の大学に入学しました。適当に選んだ専攻ですが、勉強しているうちに、日本語学習の大変さと面白さを共に感じられるようになりました。そこで、昨年、日本福岡の海外インターンシップのプロジェクトを申し込み、面接と試験に受かって、2017年1月に日本に行くことになりました。

日本へ行く、しかも日本で留学することは夢にも思わなかったです。それはまさに、私の人生における日本との「一期一会」のご縁です。

日本のアニメーションには「貴重な日常」という言葉がよく出ています。それを「一期一会」の一意味として考えると、毎日の日常生活を人生の最後の出会いとみて、大切にすべきだということでも言えます。それは、今の私にできる唯一のことです。一度しかない日本との出会いをつかみ、日々の努力を積み重ねて、夢に向かって走っていきたいと思います。

　「一期一会」とは、人が物事との間に、永遠であれ、一瞬のすれ違いであれ、あるいは、元の記憶に戻る、といった意味にこだわらないと思います。「一期一会」はチャンスに出会うというよりも、そのチャンスが人に何をもたらすのか、人生のなかで、どんな意味を持つのかということです。それは私なりに解釈した日本の諺「一期一会」の奥深い意味です。「一期一会」を私の座右の銘として、日本語を生かし、本来の夢、教育学の勉強を取り組んで、未来に教師になりたいです。教師は「人間の魂のエンジニアです」と称されます、チャンスがあれば、私は日本語を使って中国のいろいろ文化を日本人に伝いたいと思います。そして、 日本との「一期一会」のご縁を周りのすべての人に感謝したいです。

 ★二等賞

**私と日本**

**厦門大学　黄嘉珞**

小学校時代のある夏のことだった。私はこっそりと家の書斎に入って、本棚から一冊の本をとって、読み始めた。その頃の私にとって読書は一番幸せなことだったが、今もその本を自分の友として大事にしている。幼いころの記憶は鮮やかで、まるで昨日読み終わったばかりのように、ずっと印象に残っている。本の名は『門』である。内容は良くわからなくても、どんどん読み進むにつれ、暑い中にいても、この本が心を静めてくれた。言うまでもなく、ただの小学生だった私は『門』に描いた近代日本の若い知識人の複雑な心境がとても理解できなかった。しかし、私はほとんど毎日日本の文学作品に夢中になっていた。日本の文学作品は年齢や国籍を問わず、人の心を引き付ける力があるからこそ、私を夢中にさせるのだ。

「縁」というものを信じている私は、やっと念願が叶って、日本語学科の学生になった。私と日本の間に強い絆があると感じている。入学後、何冊も夏目漱石の小説をもう一度読み直した。驚いたことに、今回読んだ時、新刊さながらの新鮮みが私に押し寄せてきて、十年前の感覚とは全く違っている。それは、この十年間、私は漱石の小説を読むことにより、物事を考える人間のように少しずつ成長してきたからだと私は考える。私の「こころ」を造ったのは、漱石であると言えよう。漱石を読んだ結果、私の「こころ」は美弥子のこころであり、直のこころであり、お米のこころであり、三千代のこころであり、お延のこころとなった。こうした女たちのこころとして夏目漱石が描いたものを、自身の「こころ」の中に見つけ、確認するということが、漱石を読むことと同じになった。誠実に生きようとする意志だけでは、人間は誠実には生きられない。私は自分の「心」に信頼をおけない。「先生」のように、いつ友を裏切ることになるか、戦きながら生きてきたのである。

『吾輩は猫である』を読んだとき、主人公の猫が多くの中国の典籍や詩といった内容を引用している。それは、外国人の作家にしては案外珍しいことだと思った。私は関心を持って、漱石と中国文化のつながりを調べてみた。漱石は漢詩を好み、それを自ら創作までしていたということがわかった。それに、漱石は近代日本社会に対して、興味深い観点を提出している。この点については、思わず魯迅のことを思い出した。なぜなら、魯迅も同様に、不屈の戦士のように舌鋒が鋭くて、当時の社会における醜い現象を暴いたり、社会体制の弊害を批判したりしたからである。一般に、大和民族の特徴或いは日本人の性格を論じるとしたら、漱石を抜きにしては何も言えないだろう。「虚偽である。軽薄である。」と漱石は糾弾する。ひたすら西洋のすべてを受けようとする日本人と異なり、魯迅をはじめとして、中国の知識人は物質以外の精神的な覚醒を追求して西洋化に抵抗しようとしていたと、魯迅研究者の伊藤虎丸は考えている。半藤一利が書いた『漱石先生ぞな、もし』を読めば、「近代日本というものは、漱石によれば、すべて外圧的に西欧文明を吸収せざるを得なかったから、そうしてきただけであり、決して内発的なそれではなかった。」ということがわかる。いくら所属する地域や文化などは異なるが、魯迅も漱石も国民の個性を分析し、社会の本質を探求することをきっかけとして、文学作品を創作してきた。漱石の反省意識と魯迅の風刺芸術は刻々と私の魂を奪っていった。さらに日本に近付いたような気がした。奇妙といえば奇妙だし、私と日本は生命力のない、冷たい文字でつながっている。それに加え、わたしの性格も彼らが文字に表したエッセンスによって改善できた。

もっともっと、日本文化の源を知りたかったので、『源氏物語』を読んだ。そこで、私は平安朝貴族の優雅さに感心した。さらに、それを読みやすくするため、日本語の古典文法まで習った。古文の柔らかい表現と和歌への関心もより一層高まってきた。中学時代に魯迅が翻訳した『枕草子』を読んだことがある。その時の感覚は今でもはっきりと覚えている。この本が与えてくれたのは哀れであり寂であり情趣だ。つまり、日本的な美意識に属するのは派手さではなく、地味なものであり、静かなものだと考えられる。私はこういう美意識を身に付けたいと思いつつ、周囲の物事に隅々まで気を配っている。

このようにして、日本の文学作品を通じて、日本は私にとって見知らぬ国でなくなった。そして、私の成長に大きな影響を与えた作品に感謝の気持ちを伝えたい。

**私と日本―文学で結ぶ絆**

**華南師範大学　呉伊甸**

日本文学との素敵な出会いから、日本の全てが繋がってくるのだと感じている。

私は小学校１年生の時から本を読み始め、余裕が出るにつれて本を読むのが少年時代の大きな楽しみとなった。読めば読むほど、各国の文化の魅力にどんどんと引き込まれていった。中3の時、友達に薦められたのが村上春樹と東野圭吾の作品であった。しかし、当時の私は「どうして中国にも日本文学の愛読者がいるのだろうか」と不思議に思ったのである。

高校時代に漠然とやりたい事を探していたが、言葉では表現できない戸惑いに悩んでいた自分に苛立ちが抑えられなかった。高2の冬のある日、ふと現実逃避の為に本屋を歩き回り、三島由紀夫の「仮面の告白」を見つけた。その本を軽く数ページ読んだ時、オーラが差しているような文に私は強烈に惹きつけられたのである。修辞に富んだ詩的な文句、絶妙な表現技法が溢れており、三島氏が「文豪」とされる理由、また優美な文章から現す独特な美意識、精神や文化の素晴らしさがわかったような気がした。三島氏の著作をきっかけにして、他の日本作家も手を伸ばし、ますます興味を深めていた。『源氏物語』『枕草子』のような古典文学。近現代文学は夏目漱石、森鴎外、太宰治などは訳本で読んだのだが、異国の文化や歴史に触れるうちに、思わず憧憬の念を抱いていた。

日本文学について詳しく調べてみたところ、中日両国は文学の絆で結ばれていると感じだ。中国の詩経、漢詩や古典小説などが日本の古典に多大な影響に与え、平安文学の代表作『枕草子』に『白氏文集』が登場し、『源氏物語』が『長恨歌』から影響を受けたという事実のほか、近代においても、『聊斎志異』が芥川龍之介、佐藤春夫、太宰治などの作品の中で触れられることもある。一方、辛亥革命以降、日本文学の流入により中国文学も大きな変化を遂げ、魯迅や郁達夫のように日本文学の影響を受けた作家も少なくない。文学が文化の懸け橋となり、美意識・価値観・死生観・ものの考え方などの文化全般について、古くから現代への事象が幅広く含まれる。日本に対する認識が現在とは著しく異なっていることに思い至ったのである。

現在の中国において、領土問題や歴史認識問題で日本によくないイメージを持っている人が多い。日本のマスメディアでは中国に関するマイナスの報道も少なくない。確かにこれらのよく語られた様々な問題は、現実の一部であることは否定できない。ただし、本質的な原因は一体何だろうかという疑問が頭から離れない。

日本の文学を遡ると、日本文化の中に孕む矛盾が体感できる。「もののあはれ」のような繊細な部分がある一方、「武士道」のような固い部分も併せ持つ。また、「本音と建前」のような曖昧な部分もあり、その複雑さが窺い知れる。それらを描いた文学作品に触れることは、日本文化を深く理解するにはうってつけではないだろうか。日本文学をじっくり味わうと、日本文化の長所短所が再認識できるようになる。国々の文化の違いをマイナスにとらえるのではなく、その違いをお互いに理解し合い、両国が共生できる関係を求めながら生きたいと思う。

私は現在、大学で日本語を勉強し、日本文学本来の持つ魅力を自分の目で確かめるように努力している。両国間の溝を埋めるのはまだ時間を要するだろう。それでも私は、人々を魅了してやまない文学から受けた感動が国境を乗り越え、共通の気持ちを持ち互いに伝え合う力になることを強く信じている。

**★三等賞**

**未来の中日関係に向けて**

 大連民族**大学 外国語学院日语 王紫玉**

 日本と中国は2000年の交流があります。この2000年の間に平和時代もあり、戦争時代もあります。でも、もとも重要なのは、未来の中日関係です。

先日、あるニュースが入りました。アリペイは日本に導入しました。1000余り店でアリペイが使えます。このニュースを見た後、私はとてもショックを受けました。よく調べてみると、日本ではコンビニから空港まで多くの店がアリペイで支払うことができます。そうすると、中国の旅客と中国留学生にたいしてとても便利だと思います。中国の支払う方法が海外に導入することは中国に対しても有利なことでしょう、中国と日本の絆も深くなれると思います。

国の間の関係は利益によって変わると思います。今後、中日の間に、経済方面の交流はますます増えていくと思います。ですから、中日関係のキーワードは協力と競争であるべきです。この協力と競争を通じて，中国と日本、両方とも経済方面の実力が上がると思います。中国人と日本人の生活スタイルと考え方などはちょっと似合いますので、これから経済的な交流はきっと多くなります。協力に通じてお互いに理解することができます、競争に通じて、自分の国の不足を見つける事ができます。中日関係と言えば、まずは両国の国衆のコンミュ二ケーションが大切です。

この夏休み、故郷の瀋陽に帰りました。大連でよく日本料理を食べるから、瀋陽はそんなに発達な町ではないので、おいしい日本料理店があるのかなと思いながら、日本料理店を探しました。たまには、友達と一緒に町中に歩したとき、ある「北海道」という料理店が見つかりました。その店に入ったあとその小さな店の中で、中国人、欧米人、日本人もいます．みんなは自分の国の言葉を使って、話したり笑えたり、おいしものうを食べます.あの一瞬間、大きな世界はこの小さな料理店の中に見えました。店のオーナーさんは日本へ留学に行ったことがあります。そして、日本のおいしい食べ物と日本文化を中国に広げたいという原因で、この店を作りました。オーナーさんはそう教えてくれました。

国民の間のコンミュ二ケーションって、こう言うことでしょう。相手の国の政治、経済だけではなく、国民の生活などさまざまな方面から全体的なことを自分の国民に知らせるということです。今の時代はインターネットの時代です。テレビ、ネット、新聞などを利用してお互いの国のことを紹介したら、両国の関係はもっと良くなれると思います。

中国は国にとって、まだ若い国です。法律などはまだ不健全です。最近、話題になった小児愛事件は法律の不健全の一面が見えます。小児愛犯罪者に対して、どんな処罰をあげるのか、どうやって処罰をあげるのか、中国人は迷っています。それについての法律はまだありませんので、いま皆さんの呼ぶ声もとても大きいです。この法律は日本に勉強すべきだと思います。日本の健全な法律のと社会秩序が勉強したら。このような事件は止めることができます。そして、中国の四川省は地震多くの地方で、この夏も何回があります。毎回の地震は多くの損をします。地震に対しての経験も日本から勉強すべきです。中国人はその上，怪我をしないように努力すベきです。

全体的に見れば、日本は中国の仲間であり、相手であり、先生にもなることができます。近代に入ると両国の関係は戦火によって切り崩されたでも、いまの両国は同じ利益があります。ですから、過去は暗いが未来は明るいです。中日がほんとう仲良くできる時代は、私たちが生きる時代には訪れないと思います。しかし、私たちがしなければならないのは、過ごしずつでも、周りの人々の認識を改めていくことです。時間がかかっても子孫のときを経て、両国が笑顔で接することのできる親友国になっていることを願いたいです。私は、自分の力で、日本語を勉強した経験を将来の中日友好のためすこしでも貢献していきたいと思います。

**私と日本　　森屋先生**

  **吉林大学 王俊天**

「人生はサヨナラだけだ。」

森屋先生は最後の授業で黒板にこう書いた。その時、私は少し泣きそうになった。

「毎日会える仲間なら、別れの時にジャネとよく言うが、サヨナラの場合は永久に会えない可能性があるので、使えない。」と先生はかつて私の間違いを指摘した。

そんなことを思い出して、突然涙が溢れ、私は黒板に書いてある字をまじまじと見つめ、「サヨナラなんか、いやだよ」と小さい声で独り言を言った。その時、ちょうど一年の授業が終わった。

三年前、どうして日本語学科を選んだのか。私はうまく言えないけど、小学校からずっと大好きだった日本の歌の歌詞を読めるようになるとは、夢にも思っていなかった。日本語が全然わからない私にとって、仮名はまじないのような存在で、何回読んでも、書いても覚えるのはなかなか難しかった。そのため、本文を勉強する時、仮名の隣に中国語で読み方をつけざるをえなかった。それに対して、クラスメートたちはだんだん流暢に読めるようになってきた。他人の発音を聞いて、うらやましくてたまらなかった。いよいよ、初めての小テストを迎えた。

４点しかとらなかった。

答案用紙を見つめて、心情は大暴落だった。夜はやけに冷たく感じられて、希望が影のように薄れってきた。廊下は静かすぎ、昼の学生たちの朗読の声も消えて、私はめそめそ泣いていた。突然ドアが閉まる音がして、誰かがエレベーターの近くにある部屋から出て、私に向って歩いていた。

「どうして泣いている。」と森屋先生の声だった。

私はむやみに涙を拭って、答案用紙を振り上げ、頭を紙の後ろのに隠し、「テストの成績がよくない。」と呟いた。

「ちょっと見せて」

あの夜、十時まで先生は私の間違った所を指摘してくださった。寮までの並木道が真っすぐに長く続いて、月光はキラキラ光る。

あの夏、学生たちは故郷に戻って楽しく夏休みを過ごしているうちに、森屋先生は一人で日本に戻った。今まで、私は二度と森屋先生に会えなかった。

もう三年生になった私は夜に廊下で朗読する習慣が変わらない、しかし、変わったのはいうまでもなく先生の部屋の電気は二度とつかなかった。この三年間、とにかく前に進みたくて、具体的に何を探しているのか分からない。日本のことをもっと知りたい気持ちをもって勉強し続けていくかもしれない。そういえば、今まで私は知っている日本はただ先生たちによって描かれていた様子である。

日本は教室にかけている地図に示されるように、４７の都道府県からなっている。首都は本州のほぼ中央にある東京都、関東地方の南部と南方海上の伊豆諸島、小笠原諸島を含む。新幹線の路線図を見るだけで、朝如何に混んでいると感じられる。

日本の味は森屋先生からもらったの日本の飴、そして、教科書に印刷されたおいしそうに見えるすし、ラーメン、てんぷら、お好み焼きである。

日本の伝統は歌舞伎の物語に流れる文化の味のようなものであり、日本の民族衣装としての和服であり、生け垣に囲まれた瓦屋根の木造建築である。

日本の風景は偕楽園、後楽園、兼六園といわゆる日本の三園、宮島、松島、天橋立といわゆる日本の三景、二条城、江戸城などの古城である。しかし、一番好きな風景は商店などはなく、ちょっとした買い物なら役場のスーパーまで自転車で３０分ぐらいといわれている村の集落である。そこの夏は長雨で湿度百パーセント。

ところで、長春の夏はもうすぐ終わろうとしている。今日、新入生たちも日本語の勉強が始まる。三年前の私と同じ気持だろう。先日、森屋先生に「先生をとても懐かしんでいる」とメールを送った。ほんの僅かの字数だったが、長い返信をもらい、その内容で先生は相変わらず外国人に日本語を教えて、もっと多くの人に日本のことを紹介していることを分かった。実は森屋先生はもう７０歳ぐらいだ。私は甚く感心し、あの偉い姿が今までも目に焼き付いている。まだ、いろいろと先生と話しをたい。

　「先生お元気ですか？私は今までも日本語を大声で話す勇気がないけど、でも、日本のことにとても興味関心がある。日本語学科の学生になってよかった、先生と出会ってよかった」と届けたい。

**★優秀賞**

**未来の中日関係に向けて**

**福建師範大学    張偉**

「和をもって貴しとなす」。これは中国の『論語』にある一言である。人間関係ではなく、両国の関係もそうだと思う。平和は現在だけでいなく、未来の中日関係の重要なテーマである。平和を取るために、両国の相互理解と支持が必要である。理解はわけもなくて来るものではない。そして、支持は理解した後の行動である。だから、中日両国にとって、お互いに理解するのは中心の任務だと思う。

今年の九月22日に鄭州大学であった求人会で、シャオミーのインベーションの責任者とされる秦濤氏は「あなたが日本語専攻の学生なら、出て行ってください」と言って、「就職差別」と非難されていた。その後、秦氏の話を聞いて、憤って会場を離れた日本語専攻の学生はミニブログでシャオミーの社長としてのレイチュー氏に不満と怒りを伝えていって、謝罪を求めた。その事件は国内ミニブログと日本ヤフーのトップになってきて、両国のネチズンの間で話題になっていた。

正直に言って、ミニブログでこのニュースを読んだ後、日本語専攻の学生としての私は腹が立った。しかし、冷静に考えて、その事件によって、いろいろなことに気づく。まず、なぜその事件はミニブログのトップになってきたかと考えて、一つの答えを頭の中に現れる。その答えは多くの中国人は今もっと客観的な立場に立って、日本のことを見るということです。もちろん歴史の問題で国内でいつも過激な言論が存在しているが、時が経つにつれて中国と日本のお互いに交流が頻繁になって、利益関係を深めてきている。みんな敵意を別にしておいて、日本のことを見直し、以前見落とすいいところを発見する。私は元より自分でも思い及ばなくて大学で専攻として日本語を勉強し始めた。その前に、ただうちの残酷な中日戦争を経験したことがあるおがあさんの言葉や歴史教科書を通して日本のことをある程度わかっていた。その時に日本への感覚はよくない。しかし、日本語を接触する間に、先生から日本のことを教えてもらえて、自分自身もインタネットに通じて日本のドラマやアニメを見ている。それに、日本語クラブで日本人と互いに交流する。彼らはよく私たちが注意しないところを見つけて、新しい角度で問題を分析する。そういう二つ違い思想がぶつかって生まれる花火が一番きれいだと思う。日本の文化は私たちの文化とたくさんところが違っても同様に素晴らしいと思う。周りに小学生の時代から日本語を勉強してきた人がいるのは彼らは早めに日本の素晴らしいことを知っているからだ。要するにもしみんなもっと客観的に日本のことを見れば、きっと新しい世界を発見すると思う。

次に、なぜその事件は日本にも大きな反響を呼んでいるか、それに、なぜ両国のネチズンもそれに対する主流の言論が一致となっているかと考えて、ふっとあることを思い出す。汶川大地震が起こった後、日本の医療救援チームはリアルタイムで現場に駆け付けて、わが国の救援チームと一緒に人を救った。そのチームは外国からの救援チームで一番現場に到着するチームである。その姿に深く感動したと同時に、彼らの助けたいというはやる気持ちもちゃんと受け取ってきたのである。それに、多くの日本人もインタネットに通じて地震の死者への哀しみを伝えて、そして、サバイバルを励ましてくれてありがたいと思った。「难仪を共にしたこそ、真情が见えてくる」ということわざがあるように、困難の時、仲間を捨てないで助けあって困難を乗り越えていて、それは真の友達にほかならないだろう。その地震によって、中国と日本との両国の絆を深くして、明るい未来を合同に築くことができると信じている。

　実は、ずっと昔中国と日本との交流が存在しているのである。日本から派遣された使者は中国のことを勉強して帰国した。その後、鎖国政策と戦争は一気に両国の友誼を壊してしまった。今でも両国の公民はお互いに多少の敵意と誤解を持っている。もし過ぎたことだけに執着するなら、未来へ一歩も踏み出していない。そう言っても過去のことを無視する意味ではない。歴史を直視してから長い平和に向こうことができると思う。中日両国の友好交流の基礎はお互いの理解だと思う。だからこそ、未来の中日関係は更に一歩を進めるのがほしいとしたら、両方も歴史を避けないでお互いに話し合って理解する必要がある。周知のとおり、虹を見たければ、ちょっとやそっとの雨は我慢しなければならない。両国は助け合って、共に難関を乗り越えて、より明るい未来へ進める。

**「日本語学習の中で気付いたこと」**

**浙江越秀外国語学院　 丁亜萍**



私は、大学の専攻を選ぶとき、何となく日本語を選んだ。就職するときに少し有利になるかもしれないと思ったからである。それに、中国語と同じ漢字を使う言語だから簡単だろうと考えていた。しかし、実際に日本語の学習が始まると、そんな甘いものではなかった。漢字は同じでも、文法は全く違っていた。勉強すればするほど日本語の難しさを感じた。

中国語と日本語では、同じ漢字の熟語なのに意味が異なるものがある。例えば「妻子」は中国語では「奥さん」の意味だが、日本語では「奥さんと子供」の意味になる。私はその違いが面白いと思った。同じ漢字の熟語が多いことは分かりやすくていいこともあるけれど、中日での意味の違いを正しく知らないと、困ったことやおかしいことが起こることもしばしばだ。

ある日本人の先生の授業中のことである。先生は私たちに「将来何をしたいと思いますか？」と質問された。あるクラスメートは、「特にやりたいことはまだありません。ただし、夢があります。お金をたくさん儲けて、愛人と一緒に世界一周旅行をしたいです。」と答えた。それを聞いた日本人の先生は、「あなたは浮気するんですか？」と、ちょっとふざけられた。クラスメートが「先生、なぜそんなことを言うんですか」と驚いたように言った。すると先生は、「愛人は、日本語でどういう意味か知っていますか？奥さんの意味ではありませんよ。情婦の意味です。」と、おっしゃったのである。すると学生は、「ええ、そんな…。全然違います、私は大好きな人という意味で使いました。私の奥さんという意味です。」と、本当に恥ずかしそうに答えた。クラスのみんなは、それを見て大笑いした。また、違う授業で「従妹を食い物にする」という例文が出てきた。私は、「従妹を食べちゃうの？」と、驚いてしまった。でも、この「食い物」の意味は「自分の利益のために人を利用すること」という意味だった。私は、なぜ日本語では「食い物」が「自分の利益のために人を利用する」という意味になるのか考えてみた。食べ物を食べることで、食べた人は栄養にして健康を維持したり成長したりする。食べ物を人間が利用しているわけだ。でも、食べ物にとってみれば、それは迷惑な話だ。私は何となく理解できたような気がした。勉強すればするほど、日本語のおもしろさを感じるようになっていった。

私の大学がある街で日本人に出会うことはほとんど無い。初めて直接出会ったのは、日本語師の先生だった。学生の会話練習のために、「日本語コーナー」という時間がある。その担当は日本人の先生方である。場所は大学内にある日本風につくられた部屋だ。靴を脱いで入り、座布団に座る。私は座布団を投げるようにして置いた。それを見た日本人の先生が、「そんなに乱暴に座布団を置いてはいけませんよ。そっと静かに置いてください。」と、私を注意された。その後、私たちが自由な格好で座布団に座っていると、また先生が「皆さん、正座してくださいね。」とおっしゃった。私たち中国人にとって、正座はとても苦しい座り方だ。私は「先生、どうして正座なんですか。足が痛くなるし疲れるので、正座でなくてもよくないですか。」と言った。すると先生は、「こういう場所で座布団に座るときは、日本人は恥ずかしい格好で座ることはしません。正座は日本人の作法です。特に女性にとっては大切なことです。座り方でその人の品格がわかります。」と静かに言われた。そのとき、私は考えた。確かに日本語には複雑な敬語が存在する。相手によってどのように敬意を表すかがとても大切になる。そして言葉だけでなく、人の品格を現し相手への敬意を示す方法である礼儀作法が重要なのだろう。私は抵抗があったけれども、正座で座った。中国は礼節を重んじる国だと言われてきたが、それは過去の話だ。日本人のこの礼儀作法を重視する考え方に学ぶ必要がるのではないかと感じている。

このように、私は日本語を学ぶことを通して中日の様々な違いに気づかされた。そのとき、日本の文化の特徴や日本人の性格を知ることができた。同時に、今まで意識しないで過ごしてきた中国文化の現状と中国人の性格を自覚することも多かった。私は、益々日本への興味が深まり、日本語学習が面白くなってきている。

 **互いにステレオタイプな考えを捨てよう**

**東華大学 艾雨**

「大丈夫？」「大丈夫？」「ここは…」頭がくらくらしてきた。人に囲まれた。私は交通事故に遭った。

人生の中で、初めて担架に乗せられ、救急車で病院に行った。「障害者になるかな」「顔が傷ついたかな」「日本で死ぬのかな」様々な恐ろしいことが頭の中を駆け巡り、怖くて泣いてしまった。十数名の医者が様々な診察をしてくれ、幸い内臓も骨も大丈夫だったので、なんとか落ち着いた。運転手さんも旦那さんを連れてきて、私に謝ってくれた。良い人だなと思って、「大丈夫ですよ。」と私は言った。

しかしこの後、予想外の展開になった。信号のない交差点で相手に気付かなかったのは双方で、傷ついたのは私だけだ。また、相手は車、私は自転車だ。運転手さんの責任の方が大きいと思ったが、警察は私にも半分は責任があると判断したのだ。また、運転手さんも入院の日以降、連絡が途絶えた。学校の先生も「もし相手が医療費を払わなかったら、自分で払う？」と私に聞いた。

一体どういうことだ。なぜ責任が同じなのか全く理解できない。だが、その時は日本に行ったばかりだったので、日本語も下手で、言い争えなかった。保険があるからお金の問題はないと考えた私は、何も言わなかった。ただ、その日本人たちは冷たいと思った。先輩たちも「日本人の優しさは建前だよ、中日関係はよくないし、差別されることも普通だよ。」「前学期ほかの国の留学生も交通事故に遭ったみたい。怪我してなかったのに、多額の賠償金をもらって、警察もきちんと案件を処理してくれて、今回とは全く違う態度だったそうだよ。」と私に言った。それからというもの、日本人にやや悪いイメージを持つようになった。

案件の処理は終わったが、事故でできたまだ直りきっていない傷を見ると、冷たい日本人のイメージがいつも頭の中に思い浮かんでしまう。周りの日本人たちの笑顔を見ながら、「これも建前かな」と戸惑っていた。

いくら不満があっても、これからの一年間は日本で過ごさなければならない。何とか気持ちを切り替えて留学生活を送り、外国人交流協会に参加を申し込んだ私は小沢さんと出会った。60歳を過ぎているが、いつも私をあちこちにドライブに連れて行ってくれる。「元気で、優しいおばあちゃんだな」と思い、日本人へのイメージが徐々に変わってきた。ある日、「小沢さんは何で外国人留学生の活動にそんなに積極的ですか。」と小沢さんに聞いてみた。「みんな若くて、元気で、私も元気になりたい！それから、外国人と交流しているうち、お互いの文化とかも交流したい…中日関係はちょっと微妙だけど、中国人のみんなと付き合ってよかったと思うよ。」小沢さんの話を聞いて、私は感動した。

日本人と言っても、みあ同じタイプではない、これは小沢さんと接していて感じたことだ。国で人を分類した私が悪かったのだ。バイトで友達になった愛美さんは「艾さんは中国人の感じがしない。」と私に言った。なぜかと聞くと、「テレビや新聞などで見る中国人はうるさくて、世界のあちこちで騒いでいる感じ…でも、艾ちゃんは静かだし、仕事もてきぱきやってる。イメージと違う。」と答えてくれた。やはり、人々の行為は自分の国の教養を表すし、どんなイメージを外国人に伝えたいかは自分次第だ。

現在、政治の問題で、中日関係があまりよくないのは事実だと思う。こういう状況で、中日の国民はどうすればいいのか。国の関係がよくないので、その国の人を悪く扱うのがいいのだろうか。日本製品の不買を呼びかけることが正しいのだろうか。これらは友好関係を改善することにはつながらず、逆の道に進ませてしまうのではないだろうか。一人の力で、中日関係を改善することは難しいが、自分の行為が他国の人にどんな影響を与えるのか、考えなければならないと思う。国の友好関係を結ぶことは国民の友好関係を築くことと同じだと思う。中日友好のために、ステレオタイプから飛び出して、一視同仁すれば、友好の道に進むことができるだろう。

最初日本に来て大変なことに遭ったが、今は「日本人にどんなイメージを持っているか」と考えてみると、「まあ、人それぞれだ」と思う。今まで付き合ってきた日本人は様々だ。一人二人の日本人から日本人全体を見るのは偏った見方だと思う。日本語ができる大学生として、普通の中国人より日本人と接触する機会が多く、中国人の留学生であった私が、日本滞在の一年間で日本人にどんなイメージを与えたのか、皆の中国へのイメージを変えさせることができたのか。もし、愛美さんの話通り、「中国人は全てうるさいわけではない」と少しでもイメージを変えてもらえたなら、これも中日友好のために力を捧げたことになるだろう。

**私と日本**

**山東大学　李靖**

正直に言うと、私と日本との間に緊密なつながりがなかったとてっきり思った。あたかも冬と夏のように、到底交差できない平行線のような関係だと言っても過言ではない。

しかし、本当に、冬と夏との間に何のつながりもないのか？ある偶然な機会において、私は、両者の中に、実は、「赤い糸(いと)」が存在していることに気がついた。一年中、季節は移り変わっているのは誰も知るであろう。春、夏、秋、冬。では、まさか厳冬が過ごした後、直接夏が訪れてくるわけではない。その中で、春はさながら「調停(ちょうてい)仲裁者(ちゅうさいしゃ)」のように、こっそりと訪れてきて、また、こっそりと橋渡しのような役割を果たすのではないだろうか。そこで、突然、私はこういうことを考える。

実は、私は、自分に属する春が同様にあるのではないだろうか。ある程度において、私と日本は平行線ではなく。かえって、ずっとある「赤い糸(いと)」に引かれるのではないだろうか。この発見を私は非常に喜んでいる。

ここで私が言いたいの「春」は、毎日付き合ってくれる「日本語」のことである。しかし、それは本当の春のように優しくはない。それはあたかも“異化する人”のように、ギュッと私のくびをしめてしまい、 私は泥沼に踏み込んだように、なすすべもない。

大学に入り初日に、私は完全にそういう感じがした。事はこのようだ――初日に、先生は、それぞれの学生に何ページかのプリントを与えてくれたが、その具体的内容の記憶はもうはっきりしない。しかし、その中の一つの単語は、今まで、私の心の底にくっきり残っている。この単語があるからこそ、私の心は慌てた。実は、これは「亀」という単語のことである。私は、これが繁体の「亀」のことを知っているが、「亀」の上に、ＵＦＯのような不明なものが付け加えされている―“か”と“め”。故に、私は完全に迷った。どうしたらいいのかもわからなかった。

当時、私はどうしてもわからないところはこうだった：日本語のなかに漢字がある以上、なぜ中国語の読み方と異なっているのか、なぜ「ｇｕｉ」を読まなく、「か」「め」を読むのか。非常に不思議だと感じていた。日本語を学んだ後、私にはやっとその原因がわかった。それは日本語にそれなりの“仮名”という表音文字があり、でも、漢字を借りてきて記述しようとするからだ。私はこの原因を知った後、つまり日本語の由来は、中国と大きな関連性があるということを知り、日本語及び日本に対する親切感がわき起こった。

このまま一年間過ごした後、私はやっと日本語の醍醐味に浸れた。「大丈夫」この単語のおかげで、日本語と中国語とのニュアンスを理解することができるといえる。その時、初めて「大丈夫」この単語に接したとき、非常に驚いた。その意味は、なんと、危険や心配がなく安心できることを指すようだが、中国語では、大いに活躍できる男という意味だ。

何日か考えた後、インスピレーションがシュッと沸いた。中国語に立派な男だという意味があるからには、そこから「非常に強い」「非常に健康である」といった意味へ派生し、それで心配しなくてもいい。こう考えている間、日本語と中国語との微妙の関係が分かってきた、非常に面白い。

日本語はまるで強い磁石のように、私と日本、この関係のない平行線を交わらせた。では、将来、私と日本の関係はいっそう親しくなるのか、それとも、原点に戻るか。

実は、日本語によって、私はもう日本に強烈な優しさを持っている。適切にいうと、文字面で、日本と中国には一体どんな関係があるのか、それと、各国はどんなカルチャーショックがあるのか。これらの文化に好奇心を持っている。それで、将来においても、私と日本の関係は再び原点に戻らず、逆に、もっと親しくなると堅く信じている。

**わたしと日本**

**北京外国語大学　劉翠**

五年前、大学の日本語科を卒業したばかりだった私は日本人先生の強い勧めで初めて日本を訪ねた。それは一ヶ月余りの長い旅だった。先生に奈良・京都・大阪・富士山などを案内してもらい、かつて教科書の中だけで知っていた名所旧跡や伝統行事(例えば祇園祭など)をしっかり自分の目で確かめることができた。私にとって毎日が発見と感動と収穫の連続だった。

その後、京都の裏千家学園に留学する機会に恵まれた。留学の半年間は私の人生の一コマとして特筆すべき物語に満ちていた。記憶の鮮明なうちに、私の体験を思い出すままにまとめておこうと思う。

裏千家学園は普通の学校とは違い、名前の通り專らお茶の稽古と茶道についての知識を学ぶ専門学校である。入学した以上は格式に従って毎日着物姿で通学することになる。私は着物の着付けなど全く未経験なまま入学したので大変だった。入学式の前に大急ぎで日本の方に着付けを教えてもらったが、最初は悪戦苦闘した。朝起きして一時間かけて何とか様になったものの、寮から学園まで歩いて五分の間に帯は型崩れしてしまい、学園の更衣室までギリギリセーフという日がしばらく続いた。私が更衣室に入ると、同じコースの友達たちがすぐ集まって来て、私の周りに輪を作る。朝礼が始まるまでの短い時間にみなが手分けして最速で、しかも丁寧にあちこち手直してくれた。彼女たちのおかげで人前で恥ずかしい思いをせずに済んだ。時にはうまく手加減ができず、帯紐をギュッと締めすぎて、お腹がすいてもご飯が食べられずため息ばかりの日もあった。

朝礼では『般若心経』を唱和するのが日課だった。無信仰の私には初めのうちはただの呪文のように聞こえた。しかし、意味はわからないまま、やがて私もすらすらと暗唱できるようになった。読経の声に誘われ、心の落ち着きも得られ、慌ただしい毎日の中でも、ひと時の静謐を味わうこともできた。

学園のすぐ後ろには共同墓地があった。中国の共同墓地はほどんどが町の中心から離れた所にあるので、日本のように共同墓地を挟んで人家が軒を連ねている様は私には不思議な光景だった。中国人の私は中国のお墓が怖い。お墓に近づくと、中から霊鬼が現れて、さらわれるのではないかと思ったりする。たぶん子供の頃に大人から聞かされた怖い話が頭に焼き付いているせいだろう。日本の霊鬼が外国人の私には害を及ぼすこともないだろうと高をくくって、学校帰りに、わざわざ共同墓地に寄り道して一人で中を歩いてみたこともあった。眩しい昼間の光の中で卒塔婆の文字を目で追ってみた。明るい時間だったので、私にとっては怖いはずの墓地も特に怖いとは感じなかった。その時、私はふと昔よく見ていたアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」の主題歌の一節を思い出した「♪夜は墓場で運動会 楽しいな楽しいな」。私は一人で笑った。

私にはもう一つ、ちょっと変わった体験がある。これはお墓ではなくて東京の明治神宮で出会った二人の日本人にまつわる話である。留学中、東京で開かれた報告会に出席した後、明治神宮に行ってみようと思いつき一人で出かけた。明治神宮は、東京では数少ない緑豊かな場所で、ちょっと神秘的な雰囲気を漂わせていた。拝殿近くまで進んだ時、後ろから男性に声をかけられた。振り返えると、通勤鞄を持った四十歳ぐらいの眼鏡の男性であった。六十歳そこそこに見える女性も一緒だった。男性は「お一人ですか。東京はいかがですか」と聞いてきた。私は一人だし、もともと用心深い性格なので、警戒心を解かずに当たり障りのない会話を交わした。そのうち男性は「いま私たちは御先祖様に見守られて幸せに生きているのです」と話し始めた。いよいよ本題に入ったらしい。私は、「来た来た」と思いながら、口では「そうですね」と相槌を打ってしばらく男性の話に付き合った。男性は最後に「御先祖様にお供え物をしてみませんか」と勧めてきたので、「それは無料ですか」と聞き返すと、「少しお金が必要です」という返事であった。私も人並みに先祖に感謝する気持ちはあるが、学生の身で元々お金もないし、即座に断って心の中だけで粛々と先祖に感謝することにした。日本にいて中国の先祖に供え物をしても、先祖は受け取れないだろうし、私の気持ちも伝わらないだろうと考えたからでもある。「これはお仕事ですか」と逆に私の方から眼鏡の男性に質問してみた。彼は会社に勤めながら土曜日だけこの仕事をしているのだそうだ。男性も特にそれ以上しつこく勧める様子もなかった。そばに立っていた女性は終始無言であった。彼らは、一体どういう団体のメンバーだったのか。いまだに私には謎のままである。

日本文化専攻の私は今後も様々な場面で、これまでは知らなかった日本の姿や形に出会うことになるだろう。それが大きなことであれ、小さなことであれ私は、もう今から興味津々である。

**歳月に埋もれた銃剣**

 **南京郵電大学 郝順**

初めて日本に接触したのは、一本の歳月に埋もれた銃剣だった。

今でもぼんやりと覚えている。それは暖かい春風が吹き、辺り一面が青々とした草木に覆われた春の日のことだった。幼い頃の私は仲間と一緒に木の下で、ふわふわとした柔らかい土を掘って遊んでいた時、何か鋭いものにぶつけて、手を切ってしまった。えんえんと大声で泣いた私は血が流れ出た指をなめてさっさと家に帰っていった。

その日の夜、一体どんなもので指を切ったのか気になった私は、スコップを持って、月の光を頼りにその木の方へ歩いて行った。私はその「事故現場」に戻ると、すぐに掘り始めた。きっと鉄の棒やガラスあるいは鉄アングルだろうと思っていた私は、土の中から出てきた長い刀を見て、びっくりした。刀だった。その刀の刃は鋭くて、月の光の下で怪しく恐ろしい光を放った。

急いで家に帰って、その刀を父に見せた。それを見ると、父は「これは素晴らしい刀だ！」と言ってびっくりしていた。兵器に興味がある父は「これは、もしかしたら日本軍隊の銃剣だったのかもしれない。」と言った。初めて日本に接触した私はその銃剣を投げ出してしまった。そして、その銃剣は私の心に深く刻み込まれた。

「これは日本の銃剣だ。中国人の血に満ちた日本の銃剣だ。お前はよく覚えておくがいい。日本人は俺たちの仇だ。」父は荘重な口調で言って、その銃剣をくれた。父はまた「日本人に侵略された痛みをよく覚えておけ！」と命令した。まだ小さかった私は、その時初めて「仇」とは何かを知った。

大きくなるにつれて、日本に関する色々な本を読んだり、様々な番組やドラマを見るようになった。学校でも、日本に関する歴史や知識を先生から教えてもらった。私は日本をよく知り、その痛ましい歴史をもっと理解できるようになった。その銃剣はきれいに洗って本棚に置いた。その時、私は銃剣の泥は洗い流せるけど、中国人の心に残った痛みは絶対にきれいに洗い流すことはできないと思った。

私は大学に入ってから、毎日日本語を学習するとともに、日本についての知識も深まり、日本をよく理解できるようになった。時間が経つにつれて、日本に対する私の考えも知らず知らずのうちに変わってきた。その痛ましい歴史と本棚の上の銃剣に対して、以前よりもっと理性的な見方ができるようになった。歴史はもう歴史になったのだ。以前の痛ましい痛みも歴史になった。歴史はどうしても変わらないんだ。日本人は中国に侵略したが、日本人もまた痛ましい損失を被った。歴史を忘れることは許されないが、私達はこれから前向きに考えることができるでしょう。そして、両国はお互いに協力して発展すれば、もっと素晴らしい未来になるでしょう。

この日本の銃剣は中国の血涙史の象徴であるだけでなく、私の思想の発展を促した。この銃剣を子々孫々まで残しておきたい。そして、「むかしの日本人は中国人の仇だ。でも、現在の日本人だけでなく未来の日本人も中国人の仲間だ。」と言う気持ちを伝えたい。

**わたしと日本**

**上海師範大学　陳露文**

日本との絆は人によって違うかもしれないが、私にとっては日本人の彼氏と付き合うことから始まった。

夏休みに、上海で彼氏とけんかをした。

理由は、一緒にレストランで料理を食べている時、隣のカップルの男性は「これおいしいよ」と言いながらちょくちょく彼女に料理を取ってあげたけれども、私の彼氏は「これおいしいよ」と言うだけで、自分のお碗にしか取らなかったからだ。もう一緒に何回も食事をしたけれども、料理をとってくれたことは一度もないと思ったら、少し怒りが込み上げてきて、彼に「何で取ってくれないの？私の気持ちは重要じゃないの」と聞いた。

彼氏はあっけに取られ、しばらく何も言わなかった。「ごめん、別にそんな意味じゃないよ。ただ、日本人の習慣ではあらかじめそれぞれの分を分けて出すから、相手のために特に何かを取り分けることが不思議なんだ」と答えた。そして何かを思い出したように、「逆にさっきなんで大声でめっちゃおいしいって言ったの？そんなに大声を出すことはないんじゃない？」と不服げに言った。

「だって本当に美味しいもん。」

「小さい声で言えばいいじゃん。人に迷惑がかかるかもよ」

「わざと大声で言うつもりはないけど、小さい声で言ったら建前みたいでしょ」

「いや、それはマナーだよ。どうして中国人は周囲の人のことを思わずに突然「うわー」って笑うのか理解できないな。」

「具体的な話題よりみんなと一緒に集まって語れるのは最高だし、本当に楽しくて幸せだっていう気持ちを伝えたいから。中国人は賑やかなのが大好きだよ。でないとつまらない、あなた達と一緒に食べたくないといっているみたいで。」

「でもオーバーだよ」

私は彼の話に深く考えさせられた。中国人にとって建前のように聞こえる表現は日本人にはマナーや礼儀という守るべきもののようだ。一方、中国人の好きな賑やかさは日本人にとって行儀の悪い、人に迷惑をかける行為だ。逆に日本人が好きな静けさは中国人には物凄い寂しさを感じさせる。中国の生活に慣れている私には東京での生活は極めて不自由な気持ちがした。公共の場所で食べたり電話したりするような、中国では何でもないことが全部マナーに違反する行為だ。日本に比べて、中国では確かにゴミもあちこちに見られるし、バスや電車の中も煩い。でもそのような煩さの中に楽しさを感じ取ることができる。

そもそも文化に優劣はない。あるのは違いだけではないか。日本人は礼儀正しいと評価される一方、いつもマナーに束縛されて、建前が多く、ストレスが多いような気がする。ニュースによると、自殺率も高いそうだ。中国人の笑顔は、気さくでフレンドリーに見えるが、愛想の悪い店員もいたり、列に割り込むというようなマナーやルールを守らない行為がたくさんあることも事実だ。

文化の違いを尊重するのは大切だとよく言われる。では、尊重と言うのは一体何なのだろうか。私は二つの面があると思う。まず、共通点を求めること。つまり、交流を通じて理解を深めるようにすること。とはいえ、尊重というのは必ず相手の文化を受け入れなければならないわけではないと思う。日本人の彼氏は食べる前に、必ず「いただきます」と言うが、私に強要はしない。なぜかと言うと、人に迷惑をかけない限り、今までやっていた通りにやれば大丈夫だと思っているからだ。中国人は言う習慣がないから言わなくても問題ないと思っているのではないか。

従って、意見や考えなどが一致しない場合、互いに咎めるより、相手の立場に立って考えた方がいいでしょうか。確かに自分の国と違う文化をすぐに理解するのは無理かもしれないが、「千里の道も一歩から」というように、包容の気持ちを持って、自分が相手の立場と事情をよく考え、もう一回周りのことを見たら多分考えが変わるだろう。もし誰も譲らなければ、前に一歩も進むことができないでしょうか。

こう考えたら、彼氏が料理を取ってくれないということはあまり気にならなくなった。そんな時に、彼氏は突然料理を取ってくれた。

「急にどうしたの？日本人はこんなことはしないと言ったでしょ？」と戸惑った私に、「まあ、郷に従うのも必要だからね」と彼は笑って優しくもう一回料理を取ってくれた。

付き合う前にあまりこんなことをじっくり考えていなかったのだが、付き合いはじめてから生活における様々な違いに目を向けるようになって、確かに最初は理解しにくい所がいろいろあり、反発からけんかになってしまったこともあるけれど、この事を通じて、ある一つの事柄に対して私はどんどん日本人の立場に立てて、日本人はどのように考えるのだろうかという視点を持っているようになった。この視点を持つことが日本との距離を縮める一歩になると思う。

これは私が日本人の彼氏との付き合いを通して得た貴重な体験だ。これからもずっと大事にしていきたい。

**わたしと日本**

**恵州学院　洪斌鋭**

日本と中国の関係は、ずっと昔から、多くの人の手によって撚り合わされてきた巨大な赤い糸のようなものだと思います。両国と関係のある人々、一人一人がその太い糸を構成する一本の細い糸で、私もその糸の一つです。

私は今年日本のホテルで三ヶ月のインターンシップに参加しました。三ヶ月間、毎日毎日下手くそな日本語で自分の考えを伝えましたが、常に気持ちが空回りし相手に届かなくてがっかりしてしまいました。上司から指導してもらう時、よく怖い顔で叱られました。会社に入ったばかりの時、何をするのか全然わからなかったので、手元の仕事が終わったら止まってしまっていました。すると、他のスタッフが「ねぇ、洪君に何かをやらせて。時間がもったいないから。給料分はちゃんと働いてもらって。」と言っているのが聞こえました。それからは、その言葉を胸に刻んで、「暇になっちゃ駄目なんだ。」と自覚しました。レストラン部門でのインターンシップでしたので、御膳立てが終わったら、拭いてないお皿を拭き、たとえ宴会場に配置された日でも、暇になったら戻ってお皿を拭く作業をしていました。そのやり方が正しいと思って二ヶ月頑張り続けました。

ある日、料理を全部出し終えたので、お皿を拭く作業に戻りました。戻る前に宴会場担当スタッフには許可をもらいました。ところが、お皿を拭き始めたばかりなのに、事務所へ呼び出されました。そこにはホテルの支配人と宴会場担当のスタッフがいて、私に、「洪君はいつも精一杯頑張ってる、感心したよ。だけど、今日君は宴会場の配置だから、全ての仕事が終わったら、戻れます。」と言いました。私は「お皿を拭きに戻ったのは、やることがなくて、手持ち無沙汰に見られたくないし、サボっているって思われたくないからです。だから、今まで、手を休めずに頑張ってきました。」と説明しましたが、「だれでもそんな風に思ってないよ、洪君がちゃんと働いているのはみんな知ってるから。待つのも仕事の一環だから、自分の役割を最後まで貫いてください!」と言われました。サボっていると思われたくない一心だった私は空き時間を利用して他の仕事までやっていたのに、何が違っていたのでしょう。階段で気持ちを整理して、やはり戻ってお皿を拭き続けました。しかし、先ほどの言葉が頭から離れなくて、二ヶ月でたまった辛さが溢れ出して、我慢できなくて涙が出てきました。ちょうど韓国人のスタッフに見られてしまい、一緒に帰ることになりました。彼は私を慰め、「日本人は曖昧だからね。基本的に他人のお願いを断りはしないよ。だから宴会場の担当者も洪君が、持ち場を離れて他の仕事をしてもいいかって聞いた時、疑問に思いながらも、断らなかったんだと思うよ。だから、空気を読めるようにならないと。相手が本当は何を望んでいるのか見抜かないと。それはここで生きるためもっとも大切な技だよ。」とアドバイスをくれました。

それからは、どうやれば空気を読めるようになるのかということを繰り返し考えました。けれども理屈がわからない私は担当者の指示に従うのが精一杯でした。担当者が何を指示しているのか、どうしてその指示を出すのか、徐々に、いつ何をすべきなのか、頭では理解できていなくても、体が覚えていきました。三週後、再び事務所へ呼ばれました。「最近うまくやっているね!」支配人がそう言いました。「私はただ指示通りにやるべきことをやっているだけなんです。」と言うと、「それでいいんだよ。充分だ。空気を読むこと、いまの君なら、もう覚えただろう。」と言われました。

空気を読むことができるようになるためには、まず、自分の仕事をきっちりと最後までやり通す、責任の果たせる人にならなければいけません。他人の表情とか言葉の裏を自分の解釈で読むことが、空気を読むことではありません。今、どんな場面で他人は自分に何を望み、自分が何をすべきなのか、俯瞰的に見ることが空気を読むということなのではないかと思います。他人の言葉は、所詮導きです。その真意を見つけることができるかどうかは自分自身にかかっています。答えは自分で考え続けなければなりません。

この三か月の経験は、今後の仕事だけでなく、日常生活にも生かすことができると思います。自分の主観で物事を判断するのではなく、相手が何を望み、自分は何ができるか、これは、きっとこれからの人生にも役立つでしょう。日本でのインターンシップは楽しいだけの経験ではありませんでした。文化の違いや言葉の壁を実感した日々でした。それでも、私は中国と日本をつなぐ一本の糸でありたいと思います。わたしの細い糸も、他の多くの糸と撚り合わせていけば、もっと太い確かな糸になるでしょう。

**未来日中関係に向けて**

 **大連工業大学 盧芸芬**



秋になり、イチョウの葉が金色に輝きながら舞い落ちていました。日中関係もそのように、きらびやかになるに違いません。

「日本の侵略者は1932年に早くも奴隷教育のための教科書を書くことを命じました。占領地で親日思想を植え付け、日本文化を大量に紹介しました。その上、中国の伝統文化の内容を歪曲して、締め出しました...」テレビの中の蘇州ニュースが白黒ドキュメンタリーを放送していました。祖母は眉を顰めて、「今、日本語や日本文化を勉強していますか？ほら、ニュースがこう言っていますよ...」と私に言いました。しばらくよく考えて、いろいろなことを思い出しました。当時の日本語の教育は、奴隷教育を行った附属品です。しかし、今はまったく違います。

私達のいる時代は素質教育の時代で、日中友好の架橋になるため、日本語という科目が大学に設置されています。今、私達は自由に簡単に勉強することができます。気持ちも大きく変わりました。

私の周りにいる多くの人は日中友好のために自分の力をそそいでいます。年齢や、国籍などに関係なく、その気持ちは一番大切なものだと思います。

私の日本の先生はもう70歳以上ですが、中国で６年間生活したことがあります。相変わらず日中文化の交流の事業に力を尽くしています。白髪で、歩行がよろけていますが、私達に日本語や日本文化や日本歴史などを教えてくれます。私の日本語が少しでも上達すると、いつも励ましてくださいます。

ある授業の時、『愛のハグ』というビデオを見たことがあります。桑原辛一という若い男性が日中友好愛というハグの看板を持って、ハグを通して両国の関係を改善しようと、自分の行動を通して、人々に呼びかけています。「僕はみんなと同じです。兄弟のように、抱きしめて、両国の緊張関係を緩和しましょう」と言って、しっかりとハグしました。留学生のAちゃんの手をつかんで、ビデオを見ました。私はそのビデオの場面を思い返すと今でも感動せずにはいられません。

若い者であれ、お年寄りであれ、男性であれ、女性であれ、日本人であれ、中国人であれ、日中友好は国境を超えるべきだと思います。日本語を学んだ我々の責任は両国の友好のために自分の力を尽し、努力しなければなりません。

「特別じゃない、英雄じゃない、みんなの上には空がある。雨の日もある、風の日もある。走って 、転んで、 寝そべって、あたらしい明日が待っている。あした、あさって、しあさって、あたらしい未来がやってくる」と小さくて歌いながら、希望と未来への思いを胸に、道のそばのイチョウの葉のような、新しい年に新たな一頁を開けると私は強く信じています。

**私と日本**

**福州外語外貿学院　王暁霊**

今、テーブルの上に一枚の写真を置いてある。その写真に映っているのは自分や友だちなどの人物でもなく、かわいい動物でもない。その写真は燃えるように真っ赤な紅葉が映った風景で、私の燃えるように熱い思い出を象徴している。

今年の夏休み、私は日本へインターンシップに行った。小さい頃から日本のアニメが好きで、日本にも興味を持つようになった。このチャンスはずっと日本に行きたいと思っていた私にとって、まるで夢みたいなことだ。なのに、本当に行くことになると、「日本での生活は慣れるかな？人と話すのが苦手な私は日本人の同僚と仲良くなれるかな？日本人の友達ができるかな？」といろいろ心配事があった。しかし、そんなことで悩む自分は取り越し苦労だったと後から分かった。日本に行ってから、生活習慣は中国とあまり変わらないため、すぐに慣れた。それに、周りも優しい人ばかりだと感じた。

ある日、仕事が忙しくお昼の時間を過ぎてしまい、ご飯を食べられなかった私は青い楓の下にあるベンチに座っていて、ため息をついた。その時、送迎バスの運転手さんが近づいてきて、私の隣に座って、一つのドーナツをくれた。「先週来たばかりの中国人研修生だべ？こんな時間にゃもう昼飯ねえぞ。これ、食えや。」親切そうに見える運転手さんなので、「はい。ありがとうございます。」と私は遠慮なく受け取った。「俺、中国に行ったことがあるよ。桂林っていうことろ！食い物もうまかったし、景色もすげぇー綺麗だったべ。」と懐かしそうに話しかけてくれた。中国の話しなので、つい絶え間なく話を続けていたが、運転手さんは全然嫌がらないばかりか、私が話せば話すほど、興味津々に聴いてくれた。その時、中国に深い興味を持っている日本人も多くいるだろうなと私は思った。

私の上司もその一人であろう。「僕、中国に行きたい。行って、ニュースや新聞に載っていない本当の中国をこの身で感じて、この目で見たい。」とそう言ってくれた言葉は真実に違いないだろう。彼はいつも丁寧に仕事のことを教えてくれて、私がミスを犯しても、怒らずにちゃんとその理由を説明してくれた。しかし、残念ながら、人事異動で離れてしまった。上司にずっと言いたい言葉がありながらも、最後まで言うチャンスがなかった。「いつもありがとうございます。おかげさまで、最初に怖いと思っていた仕事も、最初に全然わからなかった仕事もだんだん慣れてきました。もし中国にいらっしゃったら、ご案内します。」と。

最も印象深い人は私より2つ年下で、初めて来日して心細い私が会社に着いた時に、最初に微笑んでくれた可愛い先輩だ。よく「これ、中国語で何て言うの？」とか「ねぇ。昨日テレビで見たんだけど、【醉虾】っていう中華料理、すごく美味しそう！」とか私にわくわくしながら話しかけてくれた。ある日、お菓子の話をしている時に、私は思わず「カヌレ、食べたい。」と言った。この町には売ってないと知っているから、ただ言っただけだった。思ってもみなかったことに、先輩が休みの時、わざわざ一時間もかかる高速バスに乗って、札幌まで行って、カヌレを買ってきてくれた。「せっかく日本に来ているのだから、美味しいものいっぱい食べてね。」と言ってくれた時、胸がジーンときた。何の意図もなく喋った些細なことを気にしてくれた人は多分親以外いないだろうと思ったからだ。帰国する前の日、「会社の楓はいつ赤くなるの？ここに着いた時、青い楓を見て、思ったんだ。きっと私が帰る時、赤くなるだろうって。だけど残念ながらまだまだだね。」と先輩に言った。先輩は何も言わずに、青い楓をじっと見ていた。彼女の目からこぼれたキラッと光る涙は今でも忘れられない。

帰国する時、「日本に来て本当に良かった。みんなに出会えて本当に良かった。」と言って、お世話になったスタッフ全員と別れを告げた。違った国の人の間もこんなにも深い感情があるということにびっくりした。日本に行く前の私は、日本という国のことについての認識が曖昧だった。日本に行ってはじめて、それは街が綺麗で、あらゆるものが精巧な国と実感し、その国民が親切で、優しい人々だと認識した。

帰国して約一か月が過ぎた。先輩はウイチャットで紅葉の写真を送ってくれた。燃える火のような色は私が日本にいる三か月間の思い出を彩っている。この写真を見ていたら、私の思いが青い楓の下に戻るような気がした。